



を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

世に「口惜しさをばねにして」という言葉がある。スポーツマンやスポーツ評論家がよく使う言葉だ。「彼は世界大会での大敗の口惜しさをばねにして練習に励み、オリンピックの栄冠を手にしたのだ」など。目標がはっきりしている短期勝負なら通用するかもしれない。しかし人生という長いスパーンで考えた場合、常時歯軋りをして目標を睨みつけているわけにはいくまい。本書のタイトル『日本史有名人の苦節時代』からは、つい功成り名遂げた人の立身出世の苦節物語かと思ってしまうがそうではない。有名人になる前の普通の人のエピソード集だ。

例 えば、日本海海戦で勝利を博したときの立役者、連合艦隊司令長官の東郷平八郎だ。世上では寡黙な人として通っている。部下の議論を黙って聞いていて、出された結論に静かにうなずくというイメージ。ところが10代で薩英戦争や戊辰戦争を戦っていたころの彼は、上司から「お前はしゃべりすぎる」と注意されたほどおしゃ

べりであったそうな。それが英国に7年間船乗り修行の留学の後、すっかり寡黙に変身したのだそうだ。それはそうだろう。明治の初め日本人留学生など少ない時代、ましてや日本人など多分一人もいない海員学校などにおいて、英語にも慣れないとあつては寡黙になるのは不思議ではない。

ま た大正から昭和初期にかけて、日本銀行総裁として、また大蔵大臣として、さらに立憲政友会総裁、内閣総理大臣として活躍した高橋是清が、15歳で仙台藩の派遣留学生としてアメリカに留学中、ホームステイ先で奴隷に売り飛ばされた話。

千 円札でお馴染みの野口英世は、22歳で東京大学付属機関の伝染病研究所に勤めたのだが、出自は貧農で学歴がないなどの劣等感に苛まれ、給与のすべてを吉原での女遊びや酒に費やし、さらに多額の借金をして遊蕩にふけた、などの話はあつと驚くと

同時に「やっぱし」と卑しい安堵感などを覚えてしまう。

現 在のパナソニック(株)の創始者松下幸之助も登場する。1929年(昭和4年)現今と似た100年に一度の大恐慌の折、企業倒産が相次ぐなか、松下電器も不況の影響をまともに受け、売り上げは激減し、倉庫に入りきらぬほどの在庫を抱えてしまう。あいにく病に臥せていた松下の枕頭に重役が集まり、「生産量と従業員を半減する」という幹部の総意を伝えたところ、松下は言った。「生産は即日半減するが、従業員は一人も減らさない」この松下の決断が全社員の奮起を促して、社業は回復し今日のパナソニックの強固な土台を作ることになる。

テ レビドラマでお馴染みの水戸黄門こと水戸光圀から美空ひばり、植村直己まで88名のエピソードを大学教授、学芸員、作家など33名の人たちが綴った本である。授業の息抜きに豊富な話題を提供してくれる一冊である。



◀『日本史有名人の苦節時代』
新人物文庫
新人物往来社編
定価 本体667円+税